http://decfamily.p1.bindsite.jp/2014/

We 35R

No.375　14/06/12

知る喜び

　朝から雨が降っていたりすると、なんとなく暗い気分になる。雨そのものが嫌いというわけではないのだが、仕事に出かける時に雨が降っていると、服が濡れてしまうだろうなとか、傘が邪魔で本を開くのが面倒だなとか、付随的な面倒くささが思われてしまうわけである。まあしかし、席替えもしたことだし、元気だして行きましょう！　M井先生には、●●がすっかりやる気を出したと言っておいたし、●●が目の前でスミマセンと謝罪もしておいた（笑）。

　以前紹介したことがあったと記憶するが、私が受験生だったころの現代文の参考書には定番があって、例えば東大を目指す学生などはほぼ全員がそれを使っていたと言っても過言ではない。現在ではちくま学芸文庫から再刊されている『新釈　現代文』（高田瑞穂）という本である。今読んでみると、かなり時代性が感じられる部分もあるし、予備校などが出している参考書や問題集などに比べると、解説なども不親切な印象を受けるが、その目指したレベルは相当なもので、今でも手に取るだけの価値を十分にもった本であるといえるだろう。

　この『新釈　現代文』の姉妹編ともいえる『現代文読解の根底』が、つい最近同じくちくま学芸文庫から再刊された。読み始めたばかりだがなかなか面白く、参考になりそうな予感がする（ただし、やはりかなり時代性を感じざるを得ない部分もあるが…）。

　直接国語とは関係ないが、勉強に関することを述べた部分を引用してみよう。

＊

　…第一章の場合も、この第二章の場合も、全体として君たちの興味を多少でも誘起することができるのであろうか、という不安である。ただしこの不安は、私自身への不安ではない。読者である年若い諸君に関する不安なのである。本当に知る喜びというものを君たちは持ち続けているだろうかという不安なのである。最近は、まじめな勉強家にしてこの喜びを知らない学生がいるからである。本当に目指すところは、テストをパスすることというのでは、私はわびしく思う。それでは勉強ということは、外からのしかかってくる重荷にすぎないだろう。その重荷に耐えつつあるうちに自然に知る喜びを内に確立することももちろんある。しかし、知る喜びを内に持って学ぶものにとっては、外からの重荷は決して単なる重荷ではないはずである。知ることの難しさをともなわない知る喜びなどというものは、もともとないのだから。

＊

　「知る喜びを根底に置かない勉強は単なる重荷に過ぎない」という指摘は至極もっともではあるが、受験という目の前に現実と日々格闘せざるを得ない受験生諸君にとっては、あまりに理想に傾きすぎた意見のように思えるに違いない。しかし、学校でなされる勉強とは、そもそもが「理想」と結びついたものなのではないだろうか。単に生きるため、生活するために勉強しているのではない。そんなことを思う時、現実は現実として、このような理想を胸にして勉強することが、やはり大切なことのように思うのである。